

[論文]

コミュニケーション能力向上のための 韓国語教育

朴 南 圭
田島ますみ

- <目次>
1. はじめに
 2. 2012年度の実験からみた可能性と効果について
 - 2.1 実験の方法
 - 2.2 実験の経過と受講生の反応
 - 2.3 さらなる可能性と課題
 3. コミュニケーション能力向上のために
 - 3.1 「テキスト」中心から「音」中心授業へ
 - 3.2 リズム・アクセントの重要性
 - 3.3 フィードバック
 - 3.4 テキストの構成について
 4. おわりに

1. はじめに

大学における外国語科目を設置する目的は、①外国語を通じて学術的な資料へのアプローチを可能にする、②当該言語圏の歴史、文化の知識とともに、実用的で使える言語を習得させ、社会に役立つ教養人を育てる、ことにあると考えられる。現在、大学で開設されている英語を除く主な外国語の科目は、ドイツ語、中国語、フランス語などがある⁽¹⁾。

中央学院大学法学部においては、英語、中国語、フランス語、ドイツ語、⁽²⁾ コリア語が選択できる。コリア語の場合、毎年20~30名程度が選択しており、2012年度までは週に2コマを2年間履修することになっていたが、2013年度から週1コマに縮小された。

外国語科目はいずれも選択必修科目であり、週1コマで2年間履修するコースになっている⁽³⁾。語学科目の目標をその実用性にあると考えれば、週1コマの2年間履修課程は、授業内で使える時間数が年間30コマで2年間履修して合計60コマにしかならず、授業内での学習だけでは、コミュニケーションに役立つ実用的な会話のスキルを習得するには時間数が足りない。

学習時間数からみると、日本語母語話者に比較的容易であるとされる韓国朝鮮語においても、韓国語能力試験のアセスメントレベルで4級の目安とされる時間数に満たない。4級のレベルとは、質問者に対して、構文、単語の知識が不十分なので限られた範囲での返答に終始するレベルであり、現状の授業時間数だけでは日常会話が円滑に行える水準に達することは難しい。

現在の通常授業内の時間数だけで会話に必要な一定水準のレベルに達するためには、個人の高いモチベーションと授業時間外の努力が必要である。しかし、すべての学生にそれを求めることは難しい。では、少ない授業時間数で外国語教育をどのように充実させたらよいか。韓国朝鮮語に限らず、外国語教育ではジレンマのような大きな問題がある。一つ目は、読み書きができることが必ずしも会話能力に結びつかないということであり、二つ目は会話

能力中心の授業をすれば、読む力と文章読解力が疎かになってしまうという問題である。

本稿ではこの二つの問題を念頭に、2012年度発音の習得と矯正のために中央学院大学法学部で1年生と2年生を対象に実施した Speak Everywhere⁽⁴⁾を使った授業実践に基づき、今後のSEの活用を含めて考察する。外国語でのコミュニケーション能力向上への可能性を探る試みとして方向性を模索したい。

2. 2012年度の実験からみた可能性と効果について

2012年度、中央学院大学で実施したSE併用授業は、韓国朝鮮語における文字と発音の違いを、連音現象を中心に授業外で口頭練習を繰り返すことで、感覚的に身につける目的で行われた。

通常の授業時間内では、時間の制約から、文字と発音の違いを法則で説明し、公式のように暗記する形式で行われる。その方法は、書かれた文字を読むときに一度別の文字⁽⁵⁾に変換する必要がある。授業内で示される代表的な例以外の文章は、公式をもとに各自が読む練習をすることで読みに慣れることを目指す。

そのような方法で、文章を自然に読むためには、個人の努力と相当量の練習が非常に重要であるが、受講生全員に求めることは難しいのが現状である。また、練習量を補うために読む課題を出しても、文章にルビを振る方法で丸暗記した場合は、応用が難しく、暗記した例文以外の文章ではまったく役に立たなくなってしまう恐れもある。

そのようなことから、通常の授業内での公式の学習に加え、SEによる新たな練習の課題を課して、担当講師の発音を真似、自分の声を録音する作業を繰り返すことで、より感覚的に身につけるように試みた。

2.1 実験の方法

図1は2012年度1年生に実施したSEプログラムの概要一覧である。4月はLL教室を使って教室内で説明とともにSEを実施した。それぞれの練習は、主に単語の学習で、書かれた通りに読めない単語を選択、発音の法則にしたがって難易度をあげていった。練習は、主に担当講師の発音や教科書の発音をリピートする訓練であったが、学習の進捗度とオーラルテストへの反応をみるため、期末テストのSEの部分は質問に答える形式にした。なかでも多くの受講者がうまく発音できない、自信が持てない部分については再度課題を出すことによって慣れていくことを狙った。

このような試みは、授業開始時に受講生に実施した「コリア語」の授業に対する要望に関するアンケートの結果に基づいている。受講生が求めている技能である「話す」ことができるようにする試みである。そのため、通常の授業に加え、インターネットを利用するSEを導入し、足りない時間数を補う形で練習時間を設けた。

WebツールであるSEを使えば、授業を教室の外に拡張することができ、受講生は、決められた日時までに、自分に都合のよい時間に無理なく発音を練習することができる。口頭練習の増強は、会話能力が実用的なレベルへ到達することにつながるだろう。現状の文字中心の語学教育から聞く・話すことを中心に変えていく、有効な方法と考えられる。

2.2 実験の経過と受講生の反応

SEプログラム開始当初は、ヘッドセットを貸与し、自宅のパソコンの設定を各自に任せた。マイクの設定等の若干の問題はあったものの、5月以降は順調に課題を提出するようになった。

授業の回数が進むにつれて、録音がうまくできない学生が少数いる反面、明らかにほとんどの学生の学習到達度が高まり、質問や次回の提出分への要望が増えた。さらに積極的に授業で発言する学生が増えた。それは、発音に

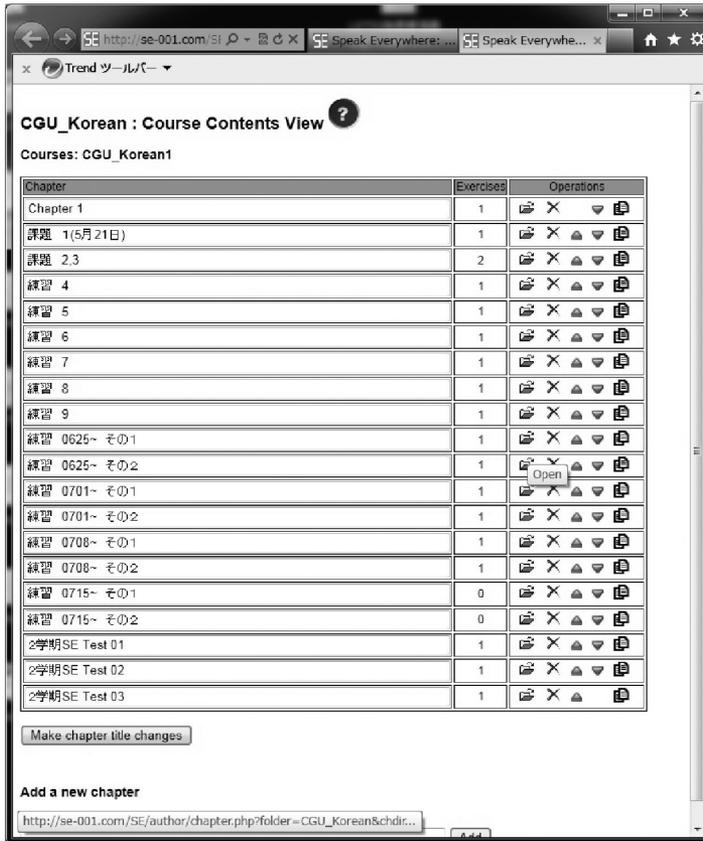


図1 2012年度1年生向けのSEプログラム

自信をつけたことが原因のひとつであると考えられる。

SEを1年間実施した後のアンケートでは、

SEをすることでより覚えるようになるから
 自分の発音を再度聞いて確認できてよい
 音声を聞いてしゃべるのは頭には入りやすい
 期間内なら好きな時間に学習できるからとても良い

もっと頻繁に課題を出して欲しい
発音がよく分かる
発音がしっかり聞けたり何度も聞き直せたから
聞いてすぐ話すことによって、覚えられた
いま自分がどんな発音をしているか分かる
分からない発音だったら何回も聞ける

などの意見が寄せられた。これらの意見はすべて1年生で、初めて「コリア語」の授業を受ける学生によるもので、発音に対して肯定的な意見が多い。それに対して、2年生では少数の反対意見が見られた。

SEによって発音がよくなったかわからない
通常授業の方が覚えやすくて良い

ということであった。これは、文字中心の授業を1年間受けてきた場合、授業時間外の学習習慣と音の練習に抵抗があるのが原因ではないかと思われる。ほかに1、2年生を通しての否定的な意見としては、

量が多い。文が長いと発音が聞き取りにくい
単語だけにして、10分程度で終わるようにしてもらいたい
録音がうまくいかない
不具合が多かった
パソコンの能力に左右される

というものがあつた。2012年度に実施したSEのプログラムは、主に単語の音に重点をおいていたため、自分で考えて答えるという問題よりは機械的な反復練習が多かったので練習時間が長く感じられたのではないかと考えられる。

図2と図3は、SEで課した練習問題の例である。日本語のヒントや単語、文、あるいはハングルによる表記を示して発音させるといった、比較的単純な練習であったため、受講生の感覚として練習分量が多いという感想につながったのではないだろうか。

また、パソコンの状態、回線状態に依存するアプリケーションであるため、状況によっては動作が不安定だったり、ログインがうまくできなかったりといった技術的な問題もあって自習に対する意欲がなくなるケースも見受けられた。しかし、以上のような問題は、今後十分改善可能なところである。

全体的な反応としては、2012年度の連音の練習を通じて、1回5分程度の練習を週に2～3回課題として課すことは、ほとんどの受講生が苦にならないと感じており、授業のカリキュラムに基づいたSEの課題を出すことは有効なことであると考えられる。

2.3 さらに可能性と課題

通年授業後の学生たちの反応として、アンケート結果をもう一点、あげて

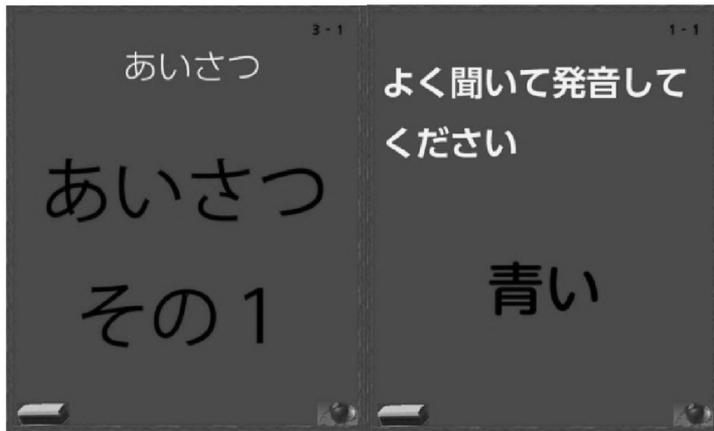


図2 2012年度1年生向けのSEの問題例

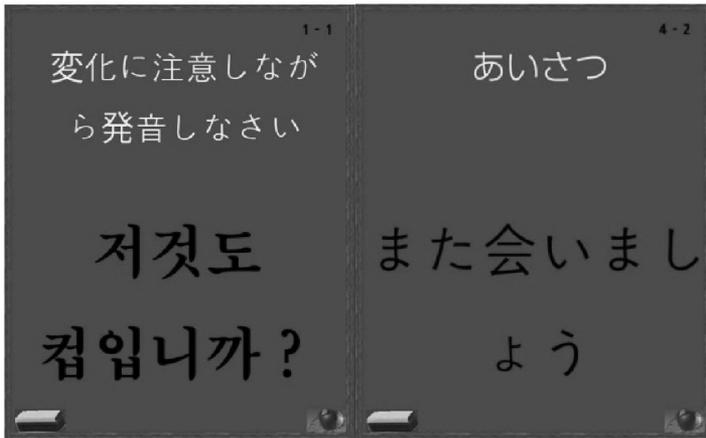


図3 2012年度2年生向けのSEの問題例

おく、図4と図5は「コリア語授業にSEが必要だと思うか」という問いに対しての回答である。1年生の7割近くが「必要」と回答しているのに対し、2年生では「必要」「不必要」がともに40%で拮抗するという結果であった。自由記述同様、ここでも1年生と2年生の違いが見られた。

前節で述べたように、SEの導入に関し、1年生で肯定的な意見が多く、2年生で否定的な意見が見られるという結果であった。1年生と2年生のアンケートの結果の違いは、2年生が1年間の通常の授業で、文字による授業とテストに慣れてからは、理解や発話の時に一度文字に変換し、翻訳する作業を経由することが原因の一つであると考えられる。

たとえば、図3の左側の問題の場合は、文字として認識できるので発音できるが、右側の日本語で書かれた文を韓国語で読み上げた場合、自分で文字化できないと発音に不安を感じる場合が見られた。2年生は、状況のイメージから連想して発話するプログラムを不安に感じることで、テストに直結する文字の読み書きを、より強く意識するようになったことが観察されたことから、文字への依存を強めていると考えられる。

文字中心の授業に慣れ、発話をテキストの文字を読み上げることですると

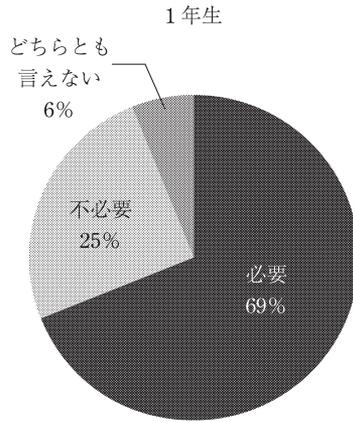


図4 SEプログラム終了後のアンケート結果（1年生）

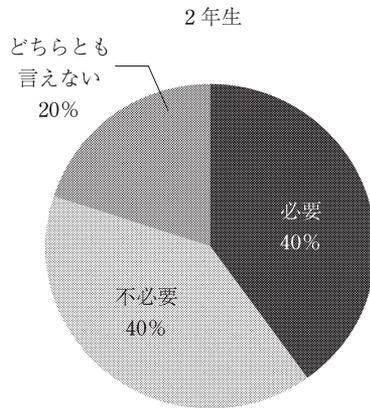


図5 SEプログラム終了後のアンケート結果（2年生）

いう学習では、現実の使用場面が限定され、多様な場面で日常的に使える外国語の習得を目指すという目標からは離れてしまう。コミュニケーション重視の授業であれば、発話時に韓国語を文字に起こす過程を可能な限り減らすことが必要であろう。それにはSEによる反復訓練で場面と状況によって最も適した答えを出す練習機会を増やすことが効果的ではないだろうか。

以上のような結果を踏まえて、SEの授業への導入は望ましい方向であり、今後の改善と工夫を重ねていけば、より効果的な学習が期待できると言える。単語レベルでの発音の矯正から、完全な文章レベルの会話や読みの練習まで、SEを使うことによって音声に焦点を当てた練習がより効果的にできるであろうと考えられる。文章の読みと発話は、いくつもの発音の法則が応用可能でないとスムーズにできない。そのような応用例の類型練習を重ねることによって、単なる文章の読みから、シチュエーションの質問に対して正確な答えを出す訓練へと進めていくことが必要である。SEを利用すれば、そのような練習機会を多く提供することが可能である。

3. コミュニケーション能力向上のために

コミュニケーション能力に重点を置いた外国語習得のためには、紙のテキストやCDだけに頼らない、教室内活動とWebの融合がより有効である。SEを使うことにより、単語レベルでの練習から文章の練習、さらには応用シチュエーションでの対応等、様々な練習課題で会話におけるスキルアップが出来ると考えられる。

3.1 「テキスト」中心から「音」中心授業へ

今までの大学における韓国朝鮮語の授業は、文字中心であった。⁽⁶⁾そのような授業では、熱心な一部の受講生のみが発言をし、大多数の受講生の関心は単位をとることだけになりがちである。

そのような状況において、2012年度の実験運用で、主に文字と音のずれを

効果的に指導するツールとして SE を活用することによって、発音の改善のみならず、授業で積極的に発言する学生が増える、モチベーションが上がる等の効果があることが分かった。SE によって、ペーパーテストや単位だけでなく、ことばの学習に対する満足度、コミュニケーション能力向上へのモチベーションの向上にもつながっているといえる。

3.2 リズム・アクセントの重要性

韓国朝鮮語の特殊性として、語順の類似性から、文字を習得し辞書を引ける水準であれば、口頭で音声化できなくても学術書、論文を読むことは比較的簡単にできる。しかし、ひとつひとつの単語を正確に読んでも、全体のイントネーションが日本語のイントネーションであれば、意図どおり通じないことがよくある。

韓国朝鮮語は、アクセントが単語の場合は最初の音に来るが、文になると変化することがあるからである。しかし、日本語は単語それぞれにアクセントがあり文中においてアクセントは変化しない。⁽⁷⁾日本語の話者からすると、韓国朝鮮語は日本語のアクセントのつけかたとは違うのだが、日本語のようなアクセントになり、語彙力があっても通じる発音になりにくい。

韓国朝鮮語は、一般的に単語の場合は最初の音が高く次音が低く発音される。しかし、文になると単語+助詞の場合は、助詞が強く発音される。さらに、激音や濃音がある場合はその音を強く発音する特徴があり、日本語の文と比べると逆のアクセントになる場合も多い。図6は、韓国語で「何をしますか」と発音した際のピッチパターンを図示したものである。疑問形であるが、文章のアクセントは「을 (日本語の「を」に対応)」や「가 (日本語の「が」に対応) の部分が強いことが分かる。

図7は、「午後 (に) 何をしますか」の文であるが、ピッチ曲線で示されるように、最も高い点は助詞である、「에 (日本語の「に」に対応)」に置かれる。

このように母語と異なる項目については特に多くの練習を必要とする。し

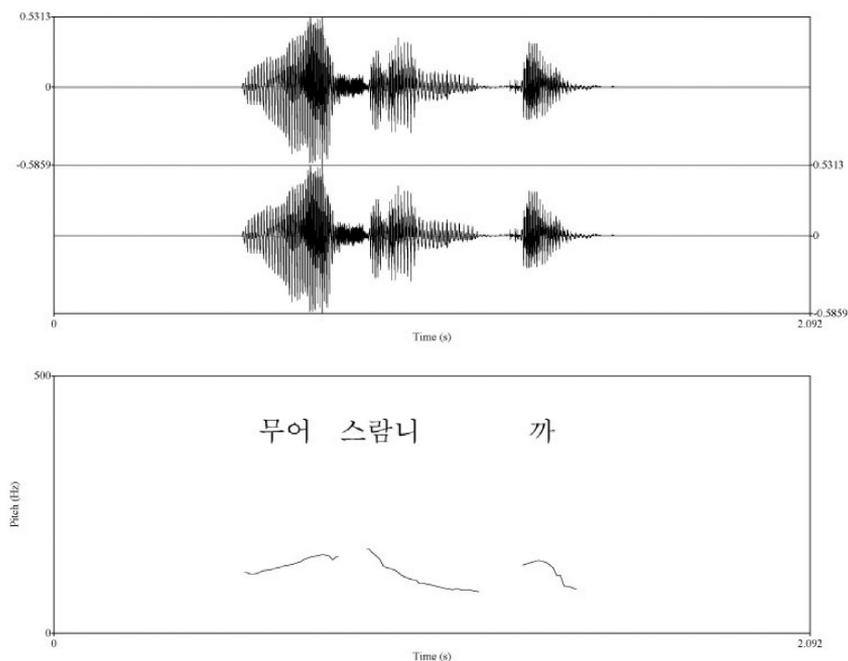


図6 標準的なアクセントとピッチ曲線 (무엇을 합니까)⁽⁸⁾

かし、これらの練習のために授業内で個人に十分な練習の時間を割り当てることは非常に難しい。さらに発音やアクセントが適切にできない場合の矯正の時間を持つことも、矯正されたかどうかを確認することも教室の授業だけでは難しい。

3.3 フィードバック

そのようなことからSEを利用して授業外で口頭練習を実施することは、コンピューター上とはいえ、担当講師と受講生の1対1の時間を持つことになり、他人の発音を気にすることなく、静かな環境で取り組むことを可能にさせる。さらにSEでは、発音のアクセントやピッチをコンピュータースクリーンに図示することができるので、受講生は自分の発音についてパター

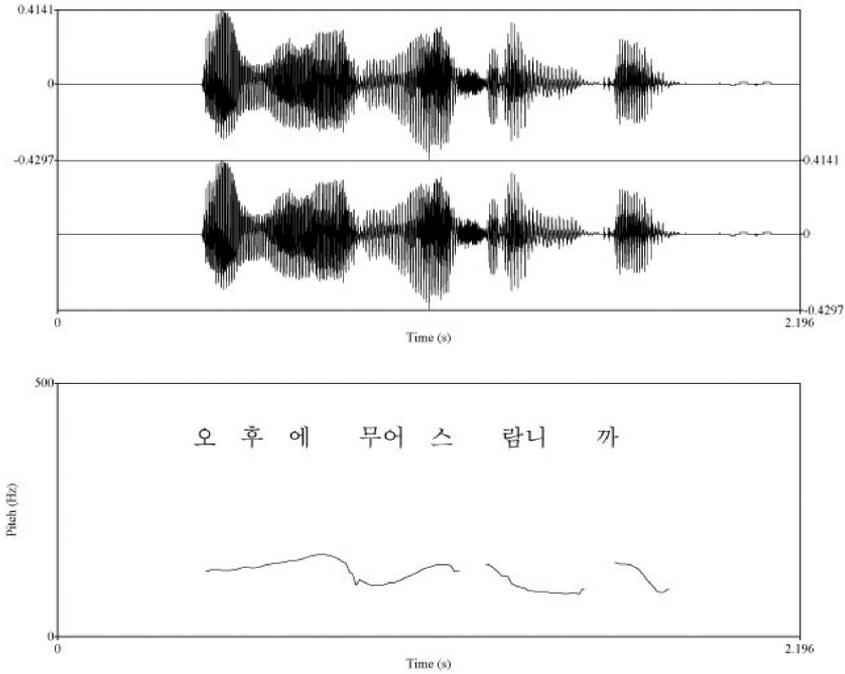


図7 アクセントとピッチ曲線 (오후에 무어스 람니 까)⁽⁹⁾

ンを分析し、どの部分にアクセントを置いたかを確認することができる。また、SEを通じて提出された受講生の発音の音声ファイルを担当講師が確認し、発音矯正のフィードバックを与えることもできる。発音矯正のフィードバックはアシスタントがいない多くの場合、担当講師が直接授業内もしくはWebを通じて個人宛てに伝達することになる。このような音声に関するフィードバックの可能性を広げられることもSEの特性の一つである。

3.4 テキストの構成について

市販されている教材用のテキストをみると、紙媒体のテキストにCD、DVDがついているものがほとんどである。SEを有効に活用するためには、適切な教材の選定が重要である。個人向けの学習書でイントネーションに触

れたものは少なく、多くの場合、ルビが振られており、それが却って正しい発音にならなくする原因になっている。授業に使う特定の教科書の例文を丸暗記する方法をとる場合もあるが、応用できる実力がなければ限られた場面でしか使えないものになる。

SEの活用を前提にしたテキストが作成されれば、従来のテキストの短所を補うことができるだろう。SEを導入したテキストを使う場合、音声でCDなどで供給する必要がない。SEによる口頭練習に加えて、読むことに重点をおいた筆記テストへの対応があれば、読むこと、聞くこと、話すことができる、コミュニケーション能力を中心とした授業が可能になると思われる。

テキストを作成する場合、①2年間の時間数を考えた教室と自習用のテキストと音声教材であること、②SEが使える回数を週2～3回として60週を目安に作成すること、③進捗度の測定は筆記試験とオーラルテストで行うこと、というような条件を前提とすれば、中央学院大学法学部での外国語のカリキュラムに沿うものとなる。また、中央学院大学に限らず、大学でのカリキュラムで使いやすいものとなるはずである。

将来的にタブレット端末に置き換わる可能性があるものの、容易にアクセスでき、すぐに確認することができるものは今のところ紙が最も有効である。紙媒体のテキストは当面なくならないだろう。

e-learningの部分に関しては、スマートフォンなどマルチプラットフォームに対応したアプリケーションへの対応があれば、どのような状態であっても練習することが可能になると考えられる。単にオンラインと教室のような二つの教育・学習環境を設けるというだけでなく、両方の環境で行われる活動を緊密に関連させ、相乗効果を出すことが重要である。⁽¹⁰⁾

4. おわりに

今までの外国語教育のように文を解説し、意味を把握するだけの教育で

は、すべてを個人の資質と努力に帰してしまう恐れがあり、現在のような多様なコミュニケーションが必要な社会では足りない部分が多い。そこで通常の授業に SE を効果的に活用することによって、より実用的に使える外国語の学習が可能になるとと思われる。今後は、良質な音声教材の作成と確保、運用のノウハウの蓄積、データの蓄積により、さらなる改善が期待できる。それらに基づいてより効率的な教育が可能になると考えられる。

〔注〕

- (1) 他にスペイン語、韓国朝鮮語、ロシア語、イタリア語等があり、ドイツ語、フランス語の場合、高校で履修機会があることから既習者の選択者が多く、中国語は地理的、社会的重要性から選択者が増えている。韓国朝鮮語は他の言語に比べて絶対数は少ないものの、地域情勢や社会的重要度から一定水準の選択者がある言語といえる。
- (2) 中央学院大学では、韓国朝鮮語の科目名称として「コリア語」を採用している。
- (3) 2013年度以降の入学生からの実施である。
- (4) Speak Everywhere は以後 SE と略称する。
- (5) 正字法に合うように書かれた文字を正字法に合わない音のまま記したもの。
- (6) 朴南圭・田島ますみ「外国語教育における Speak Everywhere の有効性について—韓国語の文字と発音のずれを中心に」『中央学院大学人間・自然論叢』35号, 2013
- (7) そのようなことがすべてにおいて起こるとは限らない（たとえば、名詞に「ぐらい」がつくと名詞が持つアクセントが消えて、「ぐらい」の「ぐ」にアクセントが来るなど）が、本論では日本語のアクセントの詳細については触れない。
- (8) 音声分析ソフトは praat (ver. 5. 3. 19) を利用。
- (9) 音声分析ソフトは praat (ver. 5. 3. 19) を利用。
- (10) 池田順子・深田淳「Speak Everywhere を統合したスピーキング重視のコース設計と実践」『日本語教育』152号, 2012

〔参考文献〕

油谷幸利『日韓対照言語学入門』白帝社, 2005

- 庵功雄他『日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク, 2002
- 池田順子・深田淳「Speak Everywhere を統合したスピーキング重視のコース設計と実践」『日本語教育』152号, 2012
- 市吉則浩『韓国語リスニングトレーニング』DHC, 2007
- 鹿島央『基礎から学ぶ音声学』スリーエーネットワーク, 2002
- 河野俊之他『1日10分の発音練習』くろしお出版, 2004
- 韓国・国立国語院『標準 韓国語文法辞典』アルク, 2012
- 鄭明石・鄭喜盛『現代韓国語 基本文型と構造』高麗書林, 1982
- 中川千恵子・中村則子・許舜貞『さらに進んだスピーチ・プレゼンのための日本語発音練習帳』ひつじ書房, 2009
- 長渡陽一『韓国語の発音と抑揚トレーニング』アルク, 2009
- 長谷川由起子「日本語を母語とする学習者の韓国語の抑揚について」(『九州産業大学国際文化学部紀要』10号), 2000
- 朴南圭・田島ますみ「外国語教育における Speak Everywhere の有効性について—韓国語の文字と発音のずれを中心に」『中央学院大学人間・自然論叢』35号
2013
- 前田真彦『韓国語発音クリニック』白水社, 2013
- KBS 韓国語研究会編著『改訂版 KBS の韓国語標準発音と朗読』, 2013
- 박봉자『한국어문법사전』연세대학교 출판부, 1999
- 연세대학교출판부『한국어 발음』, 연세대학교출판부, 1995
- 연세대학교한국어학당편『처음 배우는 한국어 읽기』연세대학교 출판부,
2001
- 한국어문화연수부편『표준 한국어 발음 연습 2』고려대학교 민족문화연구소, 2002